

協同的・互恵的な学びを目指した校内研究ノススメ

加東市立社小学校
教諭 松尾 能志

1 取組の内容・方法

(1) 児童の実態と「協同学習」

教科書を広げても、内容に意味を見出せず、教材とつなげれずにいる児童。「近くの人と話し合ってね。」と指示しても、誰とも関わろうとせず、仲間とつなげれずにいる児童。このような、学びの土俵に乗れない、乗っても途中で降りてしまう「困り感」をもっている児童が多く存在するのが本校の現状である。

しかし、学習上の得意・不得意があり、お互いに態度や性格が違うからこそ、お互いを知り、理解しようとするのが大切である。児童に、教材を介して仲間と学ぶ喜びを感じさせたい。さらに、自分の学びが仲間の役に立ち、仲間の学びが自分の役に立つという経験を積み重ねさせたい。そうすることで、自分のためにも、仲間のためにも真剣に学ぶ児童を育成したい。

そこで、「協同学習」の理念を取り入れ、人と関わることで、学習に対する主体性を高めることで、学びへの意欲を高めようと考えた。「できる喜び」「分かる喜び」「学び合う喜び」は、さらなる学びへの意欲へとつながっていく。さらに、人と関わる力を高めることで生涯にわたって円滑な人間関係を築く基盤にもなると考えた。

信頼に支えられた学級経営を基盤として、児童が相互に学び合い、自分の学びに責任をもって学習するとき、困り感をもつ児童も含め、全ての児童の学びが深まると考え研究がスタートした。研究テーマは、「協同的・互恵的な学びの構築」である。

(2) 校内研究を推進

① 個人研究テーマの設定

本校では、研究教科を絞っていない。そのため、各自で研究がしたい教科を選択する。その後、「教科部」チームを編成する。しかし、この場合、それぞれのチームが、どのように研究を進め、どのようにまとめるかが課題となってくる。そこで、研究テーマをもとに個人で研究テーマを設定することを提案した。いわば、「実践マニフェスト」である。個人テーマを作成するにあたっては、「ロジックツリー」のツールを使って作成することにした。ロジックツリー（図1）は、「思考の過程を視覚化しやすい」「協同で作成することが可能である」という点で有効であると考えたからである。「思考の過程を視覚化しやすい」については、問題解決に活用されるロジックツリーの中でも「HOWツリー」を使って、個人テーマを作成している。そのため、個人テーマを解決するために「どうやって？」と思考しながら

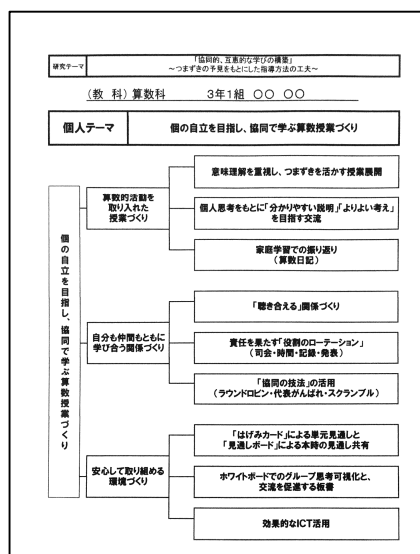


図1 ロジックツリー

リーを描くことになる。最終的には、大きく三つの観点(「教科」「学び合い」「学習環境」)で分類し、手立てや解決策を作成している。「協同で作成することが可能である」については、職員も「教科チーム」で協同しながら、次のような流れで作成した。

- (i) 「研究で自分が大切にしていること」「これから取り組みたいこと(手立て)」を各自が付箋に書き出す。
- (ii) K J法を使って分類する。
- (iii) グループで話し合い、修正や追加を行う。
- (iv) 三つの観点(「教科」「学び合い」「学習環境」)でまとめる。

最後に、一番大切なことなのだが、作成にあたっては、学年末の児童の姿、研究成果の状態をイメージして作成することを強調した。実感としては、現状より20%程度高い目標を設定することで、実践への意欲も高まると感じている。また、作成した研究テーマについては、学期に1回振り返り、修正追加していくことにした。

② 単元を見通す「はげみカード」(表1)

右は、算数部で作成された「はげみカード」である。教科の特性により様式は異なるが、ほぼ全ての教科で活用している。「はげみカード」は、単元のはじめに児童に渡し、単元を見通す。児童は「この単元のゴールは何か。」「ゴールに向かうまでにどのような学習をしていくのか。」などを知ることになる。授業の土俵に乗れない児童の多くは、何のためにこの学習をしているのかという意義が見出せない。しかし、単元のスタート時に見通しがもてることで、以前より意欲をもって授業に参加することができるようになった。また、毎時間授業の振り返りをする中で、この1時間、自分はどうだったのか(分かったのか、分からなかったのか、仲間とつながれたのか)という自己評価もできるシステムが構築できた。これらを積み重ねることで、確かな学びの足跡が刻まれ、達成感も味わえ、次の時間の目標も立てられるようになった。

以前の全国学力・学習状況調査においては、「見通し・振り返り学習活動」を積極的に行った学校ほど、教科の平均正答率が高く、小学校においては「見通し・振り返り学習活動」を行っている児童の方が、学習意欲が高い傾向が見られた。全国学力・学習状況調査における「見通し」とは授業の冒頭に目標を示す見通しである。本校では、さらに単元の見通しをもたせるために、「はげみカード」を作成し、活用している。「はげみカード」は本校の児童の課題を克服するうえで有効な手立てとなっていると考える。

③ 児童の育ちと学びを語り合う「協議会」

本校の授業協議会で大切にしてきたことが二つある。一つは、「児童と教材がつながっていたか」ということ。もう一つは、「児童同士がつながっていたか」というこ

表1 はげみカード

時間	ページ	めあて	ふりかえり
①	194 195 196 197	それぞれ単位は何か、何で表されるかを考え整理しよう。	マツコのコースは幾つあるのか よといてくわがかりました。0.5kg あって5.5kg(これもよく)ではがな んてなかと思いました。100gと10 g単位をまじく増えました。
②	198	長さや重さ、体積の単位の関係を調べよう。	長さや重さは何倍になるかとか 1kgは1000g、100gは1kgの 1/10、10gは1kgの1/100 とわかってきました。また、 1kgは1000g、100gは1kgの 1/10、10gは1kgの1/100 とわかってきました。
③	199	重さと体積の関係を調べよう。	重さは何倍になるのか、1000倍 は1kg、100gは1kgの1/10 とわかってきました。また、 1kgは1000g、100gは1kgの 1/10、10gは1kgの1/100 とわかってきました。
④	200	たしかめよう	1000g(1kg)は1kg、100gは 1kgの1/10、10gは1kgの 1/100とわかってきました。 また、1kgは1000g、100gは 1kgの1/10、10gは1kgの 1/100とわかってきました。

とである。「学ぶ価値のある課題」を媒介として「児童同士がつながる」授業、そのキーワードは「つなぐ」である。そのため、授業を参観するにあたっては、参観する児童を（班ごとなど）前もって決めておいたうえで、観察する。タブレットで写真を撮ったり座席表に記入したりすることになるが、全ての児童の様子を具体的に記録することになっている。

写真1 授業協議会の流れ

			
具体的に記録	付箋に書き出す	グループでの交流	全体での交流

協議会においては、まず、付箋に書いて個人思考する時間を確保している。児童の様子を「教材とつながっていたか」「仲間とつながっていたか」という観点で書き出していく。このことは、「その授業のねらいは達成できたのか」「できなかったのであれば、それはなぜなのか」ということにもつながっている。次に、グループでの交流を行う。ここでは、学年の教師でグループになり、書いた付箋をホワイトボードに貼りながら、意見を述べ合う。同じ意見、似たような意見をまとめたり、反対の意見を対比的に貼ったりしながら、意見を分類していく。その時に、グループで課題として挙げてきたものは、後ほど全体で協議する。（写真1）

このような授業協議会を行うことで、まず一人で考え、次にグループで協議し、最後に全体で共有するという過程を経験する。全員の思考・活動を促進し、全員参加の機会を確保することで、ベテラン教師、若手教師にかかわらず、考えを交流し合うことができるようになった。また、このような教師自身の学びが、児童の学びへと転化されればとも考えている。

(3) 「リレー学習」による算数の授業

協同的・互恵的な学びを算数の授業でも展開した。「困り感」のある児童が学ぶ喜びを実感できるよう、毎時間の授業の中で、グループやペアで活動する時間を確保し、児童が聴き合い、学び合いながら学習できるようにもしてきた。その実践の一つが「リレー学習」である。1時間の学習の流れは、以下の通りである。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> ①学習課題を確認し、本時の流れを見通す ②一斉学習 ③グループ学習「リレー学習」 <ul style="list-style-type: none"> ・1問解くための作業を4分割し、4人グループで一人1作業ずつ分担する。 ・分担する作業をローテーションしながら、グループで4問解く。 ④個人学習 ⑤まとめ・振り返り |
|---|

リレーによるグループ学習では、一人で1問解くわけではない。算数の苦手な児童も1作業ならやろうと思える。また、1作業終わっても、すぐに自分の番が回ってく

る。前の児童がやっていることをしっかり見ていないと、自分がすることが分からなくなるので、自然と学習にも集中する。ただ、自分の番になって困ったり、迷ったり、時に間違っても、すぐにグループの他の児童が教えてくれる。さらに、もし間違えたとしても、たった1作業のことなので1問間違ふことと比べると恥ずかしさもない。

このようにして、互いに解き合ううちに、一斉学習の段階では理解が出来なかったところも「そうだったのか。」と納得する。「リレー学習」の後に個人学習に取り組む。すると、自信をもって問題に取り組む姿が見られる。自分一人でできたという満足感も感じられる。この学習で「算数が楽しい。」という児童の声を多く聞くことができた。(写真2)



写真2 リレー学習

2 取組の成果

- ・個人で研究テーマを作成することで、ベテラン教師の実践内容を取り入れて実践することができる。これにより「あの先生だからできるんだ。」という個人の強みが、他の教師へも汎化させることができるようになった。
- ・「はげみカード」は、職員室前掲示板に掲示されるようになった。これにより、児童や教師間で「はげみカード」のモデリングが行われ、振り返りの質が向上した。
- ・協議会では、まず付箋に書いてじっくり個人思考すること、さらに協同の手法を使って交流することができた。これにより、若手からベテランまでお互いに成長し、学び合うと共に同僚性の構築にも貢献できたと思われる。

3 課題及び今後の取組の方向

今後、さらに重点的に取り組んでいきたいことは以下の2点である。

- ・つまずきポイントを踏まえた、指導方法の工夫
- ・協同的・互恵的学びの質を高める評価

まず、「つまずきポイントを踏まえた、指導方法の工夫」についてである。平成27年度から3年間、ひょうごつまずきポイント指導資料作成検討委員をさせて頂いた。主に「式と計算」領域を担当したが、意味理解を深めるために、図や式や言葉に関連付けながら自分の言葉で説明する学習を積み重ねることが必要であることを再確認させられた。また、1年～6年の学習の系統を意識して、つまずきを予見し、個に応じた手立てを考え、指導法を改善することが大切であることを痛感した。

次に、「協同的・互恵的な学びの質を高める評価」である。児童が知識や技能を習得するときは、その教科や学習過程に対する態度も同時に形成している。児童の態度は将来の行動に影響を与えることから、学習に対する積極的な態度を発達させることは重要な課題であると考え。協同的な学びでは、学習の成果だけではなく、そこに至るプロセスについても評価する。また、個人の活動と同時に、グループとしての取組についても評価を行う。さらには、教科内容に関わる認知的な成果、社会的スキル、態度的側面などについても評価していく。このような多様な評価活動から、学習者一人一人が自らの取組について振り返り、次に活かすよう、自己教育力を高めていくことが必要であると考え。主体的な学びを構築するために、研究を深めていきたい。